

# 歴史地図を利用した日本史授業

神奈川県立元石川高等学校 長島一浩

## 地図を利用する日本史の授業

「地図」には、歴史学習の中で必須の要素が数多く含まれている。すなわち、地図にはその地域・範囲の過去と現在が描かれており、そして時として、そこから未来の様相すら予見できる可能性も存在する。地図とは物理的な単なる地形・自然環境を示したものではなく、その地域で育まれた人々の生活、歴史の変遷が描かれたものとみなすことができる。歴史地図は、過去の時間的経過による歴史的思考力を深めるだけでなく、空間的思考力も育てることができると考えられる。また、地図の利用より期待される学習能力のねらいとしては、まず資料活用能力を始めとして、さまざまな観察力、比較・分布などをみる分析力、さらには歴史事象の把握する直観力、時間的経過の思考力などもあげられよう。地図は一種の視聴覚教材でもあり、また、しばしば地図は「読む」ものとも言われる。現在の高度に発達したCG・ビジュアルなどに慣れ親しむ生徒たちの生活感覚を考えると理解に難しい部分があると思われるが、それでも、基本的資料であり、さまざまな工夫が凝らされ豊富な情報が盛り込まれた地図の利用は有効であろう。歴史地図を「読む」ことによって、歴史的思考をさらに深め、磨いていく手だてとしたい。

## 「歴史地図」から考える古代・中世の水上交通

ここでは「古代・中世の水上交通」をテーマとする授業を例として考えてみたい。具体的には、『地歴高等地図』、p.97～98「①京阪奈～水運で結ばれた歴史の舞台」を教材として取り上げる。(海)水上の交通、すなわち水運は歴史上、極めて重要な意義を持っている。人の移動もしくは物流の手段として、水上交通がたいへんに効率的であることは論をまたない。それは交通インフラが、高度に発達した現在においても同様である。ただし、今までの授業より常々思うことであるが、当然ながら大人はもとより、

ほとんどの生徒は生活体験として水上交通の経験が乏しく、感覚的にその有効性を想像し難い面がある。鉄道・自動車・航空機などの近代以降に発達した陸・空交通手段の有効性を想像する方が、イメージ的に容易である。このような一種の先入観の是正、意識の転換のためにも、水上交通について取り上げることは有意義である。

授業テーマとしては、(1) 古代の王都と水上交通、(2) 中世の物流と水上交通、を設定し、課題の考察より古代・中世の水上交通を考えることとした。授業展開は、(1) については、「古代国家の形成」、すなわち律令体制の確立の過程を学ぶ単元の一部として実施し、(2) については、「中世社会の展開」、諸地域の動向と産業経済の発展を学ぶ単元の一部として実施したい。

## 授業例「歴史地図」から考える古代・中世の水上交通

『地歴高等地図』、p.97～98「①京阪奈～水運で結ばれた歴史の舞台」をよく参照し、以下の課題を回答しなさい。

### ■ 課題(1)「古代の王都と水上交通」

#### 古代の「京阪奈」の水系

古代・中世に多くの王都が存在した京阪奈地域は水運でつながれている。その至便な河川の水運が政治中心地の王都と他国・他地域をつないでいた、というより、その水運により王都が存在したといっても過言ではない。水運による立地の理由、および政治的中心地の存在を認識させたい。また言うまでもなく、現在の陸地の線とはおよそ異なった古代・中世の京阪奈の地形、河川・湖沼の状況について注目させ、当時の歴史の舞台の様相に思いをめぐらせたい。

古代・中世の大阪湾の海岸線と、次の京阪奈のおもな湖沼・河川の位置を白地図に描け。

- a. 淀川 b. 宇治川 c. 木津川 d. 桂川  
e. 大和川 f. 巨椋池 g. 深野池 h. 新開池



『地歴高等地図』p.97

## 王都と水上交通

古代の王都と水上交通については、まず、6世紀初頭にヤマト王権で事実上の新王統を創始した継体天皇は、「越の国」と琵琶湖水系の高島に拠点を持っており、淀川水系の樟葉宮（現大阪府枚方市楠葉）に拠点を置き即位した。この時期の外交課題である朝鮮問題に対応する場所として相応しい。「大化の改新」は東アジア国際関係への積極的コミットを前提に起こる。大和川を遡上する当時の「倭京」・飛鳥から、広大な立地と交通至便な難波の地に内裏・朝堂院を備えたな壮大な「難波宮」が中央集権と新たな官僚制・律令をめざした施設として設立される。そして東アジア戦略における外寇危機に際して、淀川水系の最奥の琵琶湖沿岸に大津宮が造営された。また長岡・平安京の造営は、平城京に比して水運の至便さと、継体朝同様、流域に基盤を置く政治勢力の支持により王権の再構築を図ろうとした意図がみ

られる。

次にあげた古代の王都（王宮）を、地歴高等地図を参照して白地図にその位置を記せ。

- 難波宮
- 樟葉宮
- 近江大津宮
- 長岡京
- 平安京
- 平城京
- 恭仁京

## ■課題(2)「中世の物流と水上交通」

### 中世の物流と淀川水運

古代の王都として定まった政治都市・平安京は、「京都」として院政期以降の中世においては経済都市の機能も併せて発展し、室町期以降は朝廷・幕府所在地、さらに宗教要地として莫大な人々が活動する一大消費地となり列島内で比類無き重要位置を占めるに至る。荘園など全国各地からの大量の物資の集積・分散地となるが、琵琶湖から大物浦（現大阪湾）を結ぶ淀川水運は、瀬戸内海海運からの物流の大動脈であり、三水系が交わる淀津が主な玄関口として位置している。また、こうした物流の存在を前提として河上の「関」が設けられるが、淀川水系だけで数百もの関が濫立していたといわれるのも大消費地へのルートならではの状況であった。

平安京～淀川河口の水上ルートにおいて、以下の重要な「津」を、地歴高等地図を参照して白地図にその位置を記せ。

- 山崎
- 淀
- 下鳥羽
- 神崎
- 江口
- 宇治
- 渡辺

京都では貨幣経済の浸透に伴ってそれを媒介する金融業が発達して経済活動に重要な位置を占めるが、さらなる商業発達や職能による専門の分化等により、営業上の権益保持を目的に権門とつながった「座」が結成される。権門の奉仕集団である供御人・神人などは座の商業活動を通じて、税減免など各種特権と保障を与えられた。有名例が淀川水運の要衝・山崎津の山崎を本拠とする大山崎の油神人である。武神・石清水八幡宮への灯油料奉納などの奉仕とひきかえに、淀川水運の関銭免除や、東国にまで広がる広範囲な販路を幕府に認可されていた。

淀川の津・山崎には「大山崎の油座」が存在したが、その「油神人」の広範囲な活動について、理由を地歴高等地図より考えてみよう。